

# 大杉 栄

——エロスのアナキズム——

森 山 重 雄

大杉には多くの伝聞、ゴシップや回想記で伝えられた逸話がある。これらは究極的には大杉伝説ともいべきものを形成することとなり、どれだけ大杉の実像に重なりあうものか疑問のものもある。わたしはかつて『実行と芸術—大正アナキズムと文学—』を書いたとき、こうした大杉伝説を排除し、書かれた文字からのみ大杉の実像を組立てようとした。しかし、歴史が実像と虚像の二重化によって成りたっているように、大杉にまつわる伝説やあるいは神話ともいべきものを無視することはできない。これを神話化の方向ではなく、実像に近づく方法として用いる時、こうしたフィクションも許されるかもしれない。

そこで一つの仮説をたててみる。大杉の英雄性と幼児性である。これは近藤憲二の『一無政府主義者の回想』に書かれている和田久太郎の説である。それによると、大杉がどんな男であったかを示すには、二枚の写真で足りる。一枚は大正九年十二月の日本社会主義

同盟創立大会の当日、おれは大杉だ！ おれは大杉だ！ と怒鳴りながら検束されてゆく写真である。もう一枚は、娘の魔子を相手に「亀の子遊び」をしている写真である。前者には大杉の英雄的な、あばれん坊的な一面がでており、後者には子煩悩の無邪気な明るい半面があらわれているというのである。

大杉には一等俳優という形容詞も与えられたが、和田久太郎説における前者には、むかしの言葉で言えば歌舞伎者の要素が感じられる。歌舞伎者には異装者という意味があることは周知の通りだが、ドテラの上に外套を着て、大きな襟巻を頭からかぶり、太いステッキを握って、眼玉をぎよろりとさせながら、大勢の巡査に検束されてゆく写真は、まさに現代の一等俳優が舞台にあらわれた図を想像させる。ドテラの上に外套、太いステッキは、大杉にとって特別の異装ではなく、ごく自然な服装(当時大杉は生活に窮していた)だったかもしれない。しかし、それが日本社会主義同盟創立大会という舞台を背景にしてみれば、一種の歌舞伎者的な立役者があらわれたという感じを持たないわけにゆかない。おれは大杉だ！ おれは大杉だ！

杉だ！ といったのは、大杉が大正九年十月以降、姿を消していたからである。十月、上海に開かれたコミンテルン主催の極東社会主義者会議に出席し、十一月下旬帰国したのである。当時、新聞には大杉の失踪についてさまざまな憶測や噂が書かれ、官憲はそれに振り回されて、血まなこでその行方を追っていたのである。こういう神変鬼没は歌舞伎者の特徴であり、大正十一年十二月、ベルリンで開催される予定の国際アナキスト大会へ出席のため、日本を脱出した時にもみられる。この時には病気で寝ている風を装って、家を脱出した。

大杉の脱出のトリックは官憲に追われる者として必要欠くべからざるものであった。近藤憲二は、もう一つエピソードを記している。当時、下関は朝鮮への要点にあたり、ことのほか警戒がきびしかった。汽車をおりて門司行の連絡船への乗りかえの道筋には幾十の眼が光っていた。ところが大杉は汽車のなかでその子供をなすけずけておいて、汽車を下りる時子どもを抱いて、子どもと夫婦のような恰好で、悠々と関所を通過したというのである。意図的に子どもをなすけただけではなく、自然に大杉の子ども好きが役立った例である。しかし、大杉は時として幼児性と英雄性を使いわけた。尾行の巡査を怒鳴りつけ、噛みつくように慣るその同じ顔に、ペロリと舌をだして同志におどけてみせる余裕があった。これを近藤憲二は「般若」と「おかめ」の使い分けと形容している。大杉自身はこれを、僕の一生を貫く「強度の強がり」と「極度の臆病」と呼んでいる。強情であればん坊的側面と、ひょうきんな「はにかみ」をもった「心の優しさ」の側面、この二つは大杉を解く鍵だと言っている。

H・マルクーゼの『エロスの文明』(南博訳)を読むと、文明を二つのパターンに分けている。一つはプロメテウスに代表されるもので、永遠の苦痛を引き受けて、文化を創造し、神に反逆するタイプであり、もう一つはオルフェウス・デオニソス・ナルシスに代表されるもので、プロメテウスの「永遠の苦痛」に対して、エロス(愛)の側面を示すタイプである。これをさきほどの英雄性と幼児性に振り分けることは、少し無理かもしれないが、強いて比定すればプロメテウスは英雄性に、オルフェウスとかナルシスは幼児性にあたるといえる。マルクーゼはプロメテウスには「実行原則」をあらわし、後者は「進歩」などが附帯しているから「実行原則」をあらわし、後者は支配の論理と理性の王国を否定し、神に敵対するから、おなじ「現実原則」であっても、喜びと充足のイメージであり、征服のための「快楽原則」をあらわしているようにみえる。

大沢正道によれば、ハーバート・リードはアナキストを定義して「成年に達したるが故に、あえて父の権威に反抗する者」と述べているというところである(『大杉栄研究』)。プロメテウスが宇宙を支配するより強大なゼウスの神に反逆したように、子供はまず第一次の敵である父の権威に反抗することによって、おのれの自立と存在権を主張する。この道をたどってアナキストとなったのは宮嶋資夫がいる。宮嶋は父殺しの衝動から出発し、その衝動を克服して、反権力を自覚した時にアナキズムに達した。

これはあとで触れるように、宮嶋のアナキズムが、魂の原郷の喪失・空無性を前提として出発したからである。大杉にはこの父殺しの衝動はなかった。大杉の父は寛容だったから、少年時代から父の

権威に反抗する必要はなかった。大杉の少年時代の反抗はかなり無目的なものであった。学校とか軍隊とか彼の自我をおさえつけようとする外部の権威に対する反抗は、やや成長してからのことであり、当初は大杉みずから言うように反抗は「生の本能的生長のしるし」(『獄中記』)であり、反抗というよりは生命力の奔騰と行ってよいような暴力の発揮であった。ずいぶん残忍な気性を養って行ったとみずから書いてるように、よく犬や猫をなぐり殺した。この兇暴さは越後の新発田という貧しくて殺伐な軍人町の雰囲気のおかげで培われたのだが、しかしある時以後、そういう野獸的行為に中止した。母の愛と父の寛大さが彼を野獸性から救ったのである。

大杉の少年時代の行為のタイプは、母を設定することでよく理解される。母は決定的であり、家の権威としては父よりも母が代行していた。大沢正道は、この母という家の権威に対して、大杉は愛情をもつて反抗したと述べているが、巧妙な言い方だと思ふ。彼の少年時代のはげしいいたずらも暴力行為も、母に甘えたいためであり、母の関心を自己の方へ引きつけたためであった。彼は母の折檻さえも心よく受けた気味がある。母の折檻は宮嶋が父から受けた拷問とちがって、生の「空無」の意識を育てなかった。したがって、宮嶋とちがって魂の救済というモチーフは必要としなかった。

ジュールジュ・バタイユによれば、エロティシズムの領域は本質的に暴力の領域であり、侵犯の領域なのであって、かりにどんな下等な生きものであるにせよ、彼らの中の存在に活を入れることが暴力なしに行われるとは想像しがたいという(『エロティシズム』)。この説に従えば、大杉のうけた折檻は、暴力によって大杉の生の存在に活を入れられたということができるかもしれない。大沢正道も指摘

していることだが、大杉の『自叙伝』は少年時代の「キタ・セクスアリス」といえる一面を備えており、大杉が性においてきわめて早熟だったことを物語っている。この性と暴力は連続しており、どちらも現実の母を超えた原母ともいふべき、母胎の深い連続性へ帰る衝動だったかもしれない。まだ理性に転化するところのできない大杉の幼児的衝動は、過剰な肉体的主義(暴力と性)へ耽溺することになるのである。

大杉が母との訣別を意識したのは、西村虎次郎という隣家の貧しい少年との友情を理解してもらえなかった時である。ある時、城跡の加治山に遊びにいった、山百合の根を掘った時に、大杉は西村虎次郎がお婆さんと二人切りの貧乏な生活をしていることを哀れんで、その収穫の全部を虎次郎に与え、自分は百合の花を、病気で寝ている母のために持ち帰った。その時、母は大お婆れた花には目もくれないに、大杉を非難して、「根の方を持ってくればいいのにね、ほんとお前は馬鹿だよ。そしていつも虎公にそんな目に遭っているんだらう」と言った。「僕はこれ程悲しかった事はなかった。涙も出ずに、ただ胸がそくそくと迫まって来るような悲しさだ」と、大杉は記している。

これは大杉が精神的に他者との断絶を意識した最初である。その他者がなによりも愛している母であるということが、大杉にとって大きな傷手であった。それまでは現実の母は、大杉にとって同時に原母であり、その間には分離はなかった。大杉が「存在に活を入れる」暴力に耽溺しても、母という大きな存在の連続性によって救いとられていた。いやこの連続性の環を引きだすために、大杉は喧嘩と悪戯と暴力に耽溺しようとしたのである。ところが、この母との了

解の断絶の意識によって、現実の母はより大きな原母からずり落ちてしまった。「そくそくと迫まって来るような悲しさ」とは、この割れ目からくる衝撃であった。彼のエロスに最初の亀裂が生じたのだ。しかし、それは大杉の生の決定的疎外とはならなかった。

ジュールジュ・バタイユはその『叛逆者の心理』(大杉訳)のなかで、叛逆者に二つのタイプがあると云い、攻撃的叛逆者・自発的叛逆者と、反動的叛逆者・復讐的叛逆者に分けている。そして、この両者を区別するのはニーチェのいう懐恨のあるなしだといっている。前者はまだなんらの加害をうけたことがなく、したがって復讐の必要もないのに対して、後者は懐恨によって復讐に向う叛逆者である。

前者が強烈な渴望をもって、現存社会の制度に反抗して立つ強者であるとするれば、後者は生の疎外から出発し、その疎外を回復するためにのみ叛逆する心情的抵抗者である。これをマルクーゼ流に言えば、生の本能と死の本能とについていいかと思われる。叛逆を生の契機とするか死の契機とするかである。死の契機とするものはテロリストとなる。

これをエロスの体験と結びつけて言えば、攻撃的叛逆者・自発的叛逆者にはエロスの傷痕がないのに対して、反動的叛逆者・復讐的叛逆者は、父性に敵対し、これを憎悪した時にすでにかれらはエロスの内傷を印しており、それが生の決定的疎外をなしてゆく。例えば宮嶋資夫の二十六歳の時の心中未遂事件は、彼の圧迫された生が、解放の出口を求めて奔出したものであった。彼は死を代償として生命の毀損を回復しようとしたのである。それは父性の権威に対する反抗の代償行為である。死を契機として神に叛逆して、絶対的自己世界の自由を獲得しようという行為であった。荒畑寒村の場合も、

桂首相の暗殺の企てが、幸徳秋水狙撃のねらいの挫折後に来ていることに注意しなければならぬ。内縁の妻菅野須賀子を幸徳秋水に奪われたというエロスの懐恨が、テロリストの行為と一直線に結びついているのである。『寒村自伝』を読んでも、幸徳秋水への復讐の挫折が、何故桂首相暗殺の企てに転化していったかの論理的説明はない。それは説明できないほど内密につながっているのだ。

わたしはかつて、「刃物の思想」という視点から宮嶋資夫を論じたことがある。「刃物の思想」とは血によって相手と同化する。あるいは相手にとってかわるといふテロリズムを秘めたものである。宮嶋の小説『土方部屋』で、「此の身動きも出来ない程、押しつけられたような生活を、すばと断ち切ってくれるような、大きな刃物が欲しくなった」と述べているように、圧迫された状況を一挙に切り放つ武器への欲求である。しかし、同時に小説『残骸』に描かれているように、愛する女を刃物で切り裂いた時に、生命の充盈と自由を悦楽していることならみれば、刃物は血によって相手と同化する手段となつていのである。いずれにしても刃物には、恐怖と歓喜、暗と光の交錯がある。結局、この刃物と血へのモノマニヤクな陶酔は、エロスのものと表裏の関係にあって一体であり、父性へのオイデパス・コンプレックスの逆転である。

「刃物の思想」とは、死を代償とする生の高揚である。それが父殺しの欲求に淵源することは、今見てきた通りである。父殺しの欲求は、母性との一体化にあり、父性の権力を象徴するものを否定することによって、世界を占有したいというオイデパスの心性が基本である。

大杉栄は軍人の家に生まれたので、十歳の時には父に従ってピス

トルの撃ち方を習い、また馬に乗ることも覚えた。また荒木新流という古い流派の剣道の免許をうけたことがあり、また棒術の心得もあった。また十四・五歳の頃、刀剣の見方も教わっている。刀が好きで、青年の頃一時は「秋水」という号を名のろうとしたが、この方は幸徳秋水という先輩に出会って放棄した。このように刃物を好んでいたけれど、刃物のない子供時代の喧嘩は別として、刃物によって血を流したことは一度もなかった。幼年学校時代に学友と格闘した時、相手も自分も刃物をもっていたので、自分ももし刃物を使ったら、相手を殺してしまうだろうと直感して、とっさに刃物を捨てた。そのために彼は刺されて重傷を負い、幼年学校を退校させられた。のちに神近市子に刺された時も、相手が刃物をもつて自分の枕元に坐って監視しており、隙があれば刺されるということがわかっていながら、ついウトウトして刺された。関東大震災で殺された時、おそらく殺されるなどということを考えないで、殺されたものと思われる。

大杉も生の疎外に無感覚だったのではない。幼年学校退校以前に強度のノイローゼ(脳神経衰弱)に陥り、軍人になることに疑問をもつたことがあった。あとで触れるように、明治四十一年九月から四十二年十一月までの二年三ヶ月にわたる千葉監獄における「死」との遭遇や、また大正五年十一月の葉山日蔭茶屋事件後における同志の離反などの時期において、生の奈落にまで下りて行く体験をもつたのである。ただ彼はその生の疎外を死の契機にはしなかった。林尚男はそれを大杉の自己回復力の早さに見ているようだが(上)、わたしに言わせば、大杉の「回復力」なるものは、根源的には彼がエロスの外傷(内傷というべきか)を持たなかったところに淵源している。

る。だから彼は生の疎外を懐恨としてではなく、攻撃的・自発的な叛逆に転化してゆくことができた。

大杉は生涯に雌伏時代を三回迎えているが、その最大な転機をなしたのが、千葉監獄入獄である。彼は明治三十九年から四十一年まで、数えあげるだけでも、電車賃値上げ反対運動における兇徒聚集罪容疑、「光」に釈載した「新兵諸君に与う」と「日刊平民新聞」に釈載したクロボトキンの「青年に訴う」の両事件における新聞紙法違反、金曜会屋上演説事件における治安警察法違反などで、断続的に入獄していたが、その最大なものは明治四十一年六月の神田錦輝館における山口孤剣出獄歓迎会での赤旗事件で、二年六月(前刑通算)という長期の懲役に科されたことである。彼は九月に千葉監獄に移送されたが、この時あわてず騒がず、自己の思想の根源的変革をめざして、従来読んで来たアナキズム関係の読書から遠去かり、社会学・生物学・人類学・心理学などの専門書を読むことによって、独特の社会思想の体系の構築をめざしたのである。彼は父に手紙を出して、生物学と人類学と社会学の相互関係の研究を完成する費用として、三百円貰うのと引換に、魔嫡の願いを書き送ったくらいである(それは実現されなかった)。

しかし、大杉が千葉監獄において、一個の人間として大きく成長したのは、彼の「特権者」としての「監獄人」の自覚、「監獄でできあがった人間」としての独自の哲学を体得したことである。「入獄前の僕は、恐らくはまだどうにでも造り直せる、あるいはまだ碌にはできていなかった、ふやふやの人間だった」(『続獄中記』)という。明治三十六年十二月、十九歳にしてはじめて平民社を訪れて以来、翌三十七年から「週刊平民新聞」の雑務を手伝ってはいたが、

一方、外国語学校を卒業したら、陸軍大学の教官となって、幼年学校時代の秀才等に「教官殿」と呼ばして、鼻を明かしてやろうなどという子供らしい考えがないでもなかった。ところが二十二歳の春から二十六歳の暮近く迄の獄中生活は、大杉の骨髄にまで喰い入り、彼の教養・知識・思想・性格はすべてこの入獄中に養いあげられ、鍛えあげられた。「僕の知情意はこの獄中生活の間に初めて本当に発達した」と彼がいうように、監獄は大杉の「わたしの大学」であるばかりでなく「故郷」でもあった。いろいろの人情の味、自分とは違う人間に対する理解とか同情とかが初めて分つただけではない。「いっさいの出来事をただ観照的にのみ見て、それに対する自己を実行の上に現わすことのできない囚人生活によって、この無為を突き破ろうとする意志の潜勢力を養った」のである。この点が大切である。隔離され閉ざされた籠りの状態において、はじめてこれを突き破ろうとする力も生じてきたのである。

ここには時間的順序が無視されて記されているが、「一親友の死」とは明治四十二年九月頃死んだ横田兵馬のことである。横田は幼年学校を卒業する間際に、危険思想のかどで退校を命じられ、のちアナキストとなった人物で、当時第一高等学校に在学中であった。大杉と非常に親しかったらしく、堀保子宛の手紙(明四二・一〇・九)に、「僕は彼の計を聞いて、あたかも僕の計に接したような気がする」と記している。「父の死」は横田の死につづく四十二年十一月のことである。「一同志の獄死」とは多分、大杉が千葉監獄出獄後の明治四十五年三月、千葉監獄病監でハンガーストライキを行って死んだ赤羽巖穴のことであろう。「一同志の出獄後の狂死」とは、同じ赤旗事件で千葉監獄に入っていた森岡栄治のことである。これには同じ被告の佐藤悟の不放罪冤罪事件がからんでいるが、直接の関係がないので省く。「友人等の死刑」とは、うまでもなく大逆事件のことである。四十三年、大杉の入獄中、幸徳秋水事件が起き、彼も一時、嚴重な警戒の下に千葉監獄から東京監獄に移送され、検事局へ呼びだされて事件関係を調べられ、危うくこの事件に引込まれようとした。この時、大杉は幸徳らと東京監獄の廊下ですれちがっている。大杉も死刑の一手前まで近づいたわけである。

「東京監獄で押丁を勤めていて、僕等被告人の食事の世話をしていて、死刑執行人についての印象。友人等の死刑後のその首に残った、紫色の広い帯のあとについての印象。千葉監獄在監中の、父の死についての印象。一親友の死についての印象。また、牢獄の梁の上からぼたりぼたりと落ちて来る蠅の自然死についての印象。一同志の獄死についての印象。一同志の出獄後の狂死についての印象。その他数え立てればほとんど限りのない、いろいろな深い印象、というよりはむしろ印象が、死という問題についての僕の哲学を造りあげた」(『続獄中記』)。

幸徳らの死体をみたのは、千葉監獄を出獄(明四三・一一)した翌四十四年一月のことである。一月二十四日、大逆事件被告十二人の死刑が執行され、大杉は堺利彦・石川三四郎とともに翌日、落合火葬場に幸徳らの遺骸を送った。その時「その首に残った、紫色の広い帯のあと」に直面したのである。大杉はこの時、東京監獄で会った死刑執行人の太い土色の指を思いだしている。この死刑執行人とは、長い間押丁(看守の下廻り)を勤めて、大杉ら被告人の食事の世

話をしてきた老人である。この老人は見るからに気味の悪い形相の男で、蒼ざめた土色の顔と灰色の濃い髻、殺人犯のもつ獯猛で執拗な眼の光り、しゃがれてどこまでも強請してくる低い声をもって、食器口のところへこの男に顔を出された時は、ぞっとしたと『統獄中記』に記されている。

とにかく、大杉のこの「死」についての深い体験が、彼の「監獄」でできあがった人間」を形成し、「監獄人」として新たに社会へ立ち向わたるのである。

## 二

「春三月縊り残され花に舞う」。千葉監獄を出た翌春、このような句を詠んだ大杉の前には、困難な「冬の時代」が待っていた。大正元年十月、荒畑寒村とともに「近代思想」を創刊するまでの約二年間は、文字通り雌伏の期間であった。官憲の作成した『大杉栄の経歴及言動調査報告書』(鈴木茂三郎編「社会文庫」)を見ると、この期間は時々の同志茶話会に出席する位で、ほとんど目立った活動はない。堺利彦が創立した売文社(明四三・一二)の社員として協力し、茶話会も堺の主催する会が多かった。

ここで堺利彦との関係に触れておかなければならない。大杉は二十二歳の時、麴町区元園町の堺利彦の由分社(『家庭雑誌』の発行元)に同居したことがあり、その因縁で堺利彦の義妹で堀紫山の妹でもあった堀保子と結ばれたのだから、一時は一心同体といつてよいほど親しかった。林尚男は大逆事件後の「全軍総くずれ」といった局面の中」における堺利彦の活動を評価して、「彼は殿軍の将としてのたたかいかを、ほとんど間然するところのない形でたたかった」

と述べている(3)。たしかに売文社という根拠地を作ったのは、堺利彦の実践家としての着眼の鋭さをしめしている。しかし、大逆事件後の後退戦は、堺利彦一人でたたかったのではない。とくに「逆徒」の処刑のあと始末や、遺族の慰問などは大杉も行動をとるし、かえって堺よりは熱心だったのではないかと思える節がある。

明治四十四年一月二十五日に、堺利彦、石川三四郎とともに幸徳秋水らの遺骸を、落合火葬場に送ったことはすでに述べたが、一月三十日には堺利彦方における大逆事件刑死者死体引取慰勞会に、大杉も出席している。さらに三月十七日には大阪に旅行して、同市の大逆事件受刑者、三浦安太郎の実父徳蔵、同武田九平の実弟伝次郎、及び九平留守宅を慰問している。また、大正二年一月二十六日に、同行十人とともに、市ヶ谷の道林寺に古川力作の墓を、淀橋の正春寺に菅野須賀子の墓を、染井の墓地に新村忠雄と奥宮健之の墓を見舞っている。また同年の二月二日には、大逆事件の被告として秋田監獄に入獄中の崎久保誓一の妹、崎久保静江とともに秋田に旅行し、秋田監獄で坂本清馬に面会し、八冊の書籍を差入れている。坂本清馬は社会主義とは縁を切ったといつてそれらの書籍を大杉に持ち帰らせている。

幸徳秋水の死体を処置した夜、あれほど温厚な堺利彦が、交番側のガス燈をステッキで次々に割ったというエピソードを、石川三四郎の『自叙伝』が語っている。このやり場のない「どす黒い憤怒」(大沢正道)は、同時に大杉のものでもあった。大阪の遺族を慰問した報告を、大杉は神楽坂俱樂部の茶話会で行っているが、その時、遺族が「忍びザル迫害」をうけていると述べている(前記「言動調

査)。しかし、この「どす黒い憤怒」も、しばらくは遺族の慰問や同志茶話会にだめするしかなかったのである。だが、秋水亡き後、あれほど固く結ばれた堺利彦とも、運動の持ち方については、しだいに意見を異にするようになった。いうまでもなく堺利彦は、この「冬の時代」を隠忍して時期を待つ方であり、大杉は率先して時期を作らねばならぬという考えであった。

大杉のこの時期創出論に共感したのは、周知のように荒畑寒村であった。荒畑寒村と行動を共にするようになったのは、史実にあらわれたかぎりでは、明治四十一年六月の赤旗事件からであるが、ほんとうに親しくなったのは千葉監獄においてである。四十三年二月の堀保子宛の手紙に、「横田のかわりに僕は寒村を得た。彼は、目今失意の境にある、よく慰めてやってくれ」と書いている。寒村は大杉より早くこの二月に満期出獄していたのである。「失意」とは寒村の入獄中、内縁の妻菅野須賀子が幸徳秋水の許へ行ったことをさしている。『寒村自伝』にはこの時大杉は、「秋水は獄中の同志から愛人を奪わたったのだ、菅野は陣笠を首領にのり替えたんだ」と言っていたと書かれている。いかにも大杉らしい表現で寒村への同情をあらわしている。しかし、幸徳秋水の逮捕を知った大杉は、堀保子に秋水の母を呼ぶ必要があるなら、家と呼んで世話してやってくれないかと依頼している(明四三・六・一六、書簡)。保子が菅野問題で秋水に悪感情をもっていることを知りながらである。このあたりの感情の機微に、大杉のエロスのアナキズムが具現されているようである。味をひかれる。

寒村とはじめた「近代思想」は、政治運動や労働運動は許されぬから、文学にかこつけて平民文学とか社会文学とかの名のついた文

芸運動をやるのだと、大杉が千葉監獄を出た時から考えていた計画の具現であった。建前としては一歩後退した地点からの出発であったが、しかし、その内実はそんな便宜的なものではなかった。「近代思想」によって、千葉監獄以来の大杉の蓄積と思索と全能力が発揮され、開花したのである。その原動力は彼が千葉監獄を出た時の確固たる信念にあった。スバイの調査によれば、大杉は出獄後、「悔悟ノ念ナク」次のように「放言」したという。

「二箇年半(実は二年三ヶ月)ノ在獄ハ主義ニ関スル十分ノ研究ヲ為サシメ吾人ノ意志ヲシテ益々堅固ナラシメタリ此点ハ政府ニ対シ深ク感謝スル所ナリ」

勿論、この監獄体験は、大逆事件によって「どす黒い憤怒」に色どられていた。明治四十三年十二月、大杉は堺利彦を介して獄中の幸徳秋水から形見としてバクーニンの大額面を贈与され、その後さらに剃刀一挺をおくられたと言われている(前記「言動調査」。自分の後継者として幸徳秋水がいかに大杉に期待していたかがわかるエピソードであり、剃刀はなにか暗示的なものを感じさせる贈り物だが、しかし大杉は懐恨し復讐という反動的叛逆者の道をとらず、したがってテロリズムに走らなかつた。感情的には「どす黒い憤怒」によってテロリズムとすれすれのところまで行つたが、いつもこれを抑えていた。そして、これを思想的に昇華させたのである。「近代思想」に発表した「生の拡充」「征服の事実」「正気の狂人」などがそれである。

大杉は大正九年に執筆した「クロボトキン総序」(大九・五一一「改造」)の中で、「僕は決してクロボトキン大明神のもうし児でもなければ、またいわゆる無政府主義などという至極量見の狭い狂信

者でもない。ただちょっと気違いじみた一人の人間様であるだけのことだ」と述べている。この「気違いじみた一人の人間様」とは、「人の厭がることや恐がることをことさらに言ったりすることの好きなのが、僕の持つて生れた厄介な病氣なんだ」という言葉から判断することができよう。また彼は「少々気違いじみた人間様の言葉が可笑しかったり癪にさわったりするようでは、無政府主義の精神はとも分りませんよ。クロボトキンの著書の神髄はとも掴めませんよ」とも述べている。

クロボトキンがシベリアで送った五年間において、「人間と人間の性質についての純正な教育」を学び、最善の人も最高の人も、社会の上流に立つ人も、またどん底に蠢めいている宿なしや、済度しがたき罪人も接触したように、大杉にとって明治三十九年からの三年四ヶ月の断続的な獄中生活は、大杉が最底辺の人達と接した人生体験であった。彼はここで他では容易に学ばない多くの教訓を得た。彼は社会学と生物学と人類学とを学ぶことによって、学問に対する情熱を呼びおこし、一時は学者になって見ようかなどと考えたこともあったが、学者の愚かしさを知ることでも馬鹿げた考えを捨てたのも、獄中のことである。また獄の組織を通じて官僚と行政機関に対する軽蔑と、人間に対する深い愛をも体得した。

『続獄中記』には、手錠と足枷をはめて、重い分銅のようなものを鎖で引きずって歩いている囚人が描かれている。この囚人のことは荒畑寒村の『冬』という小説にも描かれていて、この幽霊のような囚人に出会ってO(大杉)は、「人間が同じ人間に対して、よくあんな残酷なまねが出来るね」と言って顔をそむけたと書かれている。大杉の『続獄中記』には、「いつも僕の隣りにいた荒畑は泣き出しそ

うな顔をして眉をびりびりさせた。そして誰も、その男の方をちょっと振りむいただけで、幾秒間の間でも直視しているものはなかった」と書かれている。ここに明治官僚制度下の隠蔽された残酷な地獄絵の実態にふれえた鋭敏な感覚がみられる。

この残酷な「手錠・足枷」「重い分銅」をはねのけるには、野獸になるかそれとも小羊になるしかない。大杉はこの「野獸」の道を選んだのである。これも獄中で与えられた教訓であった。大杉は『続獄中記』に「野獸」という詩をのせており、幾度懲罰を食ってもへこたれずに反抗して、ついに監獄のなかで「一種の治外法権」を獲得した野獸のような囚人を書いている。

こういう底辺の人間のもつ一種の原始的原力への憧憬は、大杉がかつて少年時代にもついていたものであり、インテリゲンチヤに転生するにいたり次第に畏いつつあったものである。赤旗事件を頂点とする大杉の何回かの法律違反も、この野獸的反抗のあらわれとも言える。しかし、「近代思想」のなかに再生されていった原始的原力は、もはや野獸そのままではなく、大杉がいうように「一種の気違いじみた」狂熱としてのそれである。その端的な表現が「正気の狂人」論であった。これをジュールジュ・ソレル風に言えば、「暴力の倫理性」とでもなるうか。しかし、大杉のこの「気違いじみた」狂熱が、たんなる非合理なものでないことは、「生の拡充」のなかで生のこの直接としての実行が、近代人にとって多年の観察と思索とから、生のもつとも有効な活動として生まれたものであると述べていることによってもわかる。また大杉は社会学や生物学に牽かれていたが、彼の科学観はいわゆる科学万能論ではない。理知や理性の所産たる科学は、自然に対するわれわれの能力を確かめるものに過ぎ

なくて、それだけでは生の本質を全体的につかむことはできない。われわれ自身の「非理知的根柢または時として無意識の中に」また「われわれの暗い憧憬や本能」の中に、理性の明るい判断よりも遙かに生についての本質が潜んでいると述べている(クロボトキン総序)。

「賭博本能論」も「正気の狂人」と並んで一種の狂熱論である。大杉はここで「あらゆる大情欲の底に、危険という引力がある。逆上のない逸楽はない。恐怖のまじった逸楽は狂熱に導く。かくのごとき逸楽の中には、剛胆者の全筋肉をふるい立たしめるものがあるのだ」と述べている。この狂熱的な闘争本能は「物的領域から知的領域へ移って行っても、その熱と幻惑とはいささかも失われぬ」。それはさらに進んで道徳的領域にまで移って行き、情欲に対する意志の内的闘争となつて、その勝利は無限の歓喜を生ぜしめると論じている。

これらの諸論文は、いわば「暗い憧憬や本能」の思想的結実であった。大杉は生の法悦とか自我の充実、生の最高の山頂、正気の狂人などという言葉を使っているが、ジュールジュ・パティユによれば、法悦(エクスタシー)は恐怖の乗り越えに基づいているという(エロティシズム)。大杉も「僕はきつと心は非常に臆病者なのだ。それとも僕の心の中には、無知な野獸人の恐怖が、まだ多分に残っているのだ(「お化を見た話」と述べている。このことを逆に言えば、大杉が野獸人のアニミズムを自己の下意識に認めながら、意識的にはそれとは大きく離れてしまったことを自ら承認したとみられる。パティユは生はその本質において、一つの過剰であり、生とは生の浪費なのであると述べている。この観点から言えば、恐怖と法悦の交

錯は、その過剰からきているということになる。ともに生の内奥への連続性への道をひらくものであって、権威と秩序を仮装しているこの世界の限界を破るには、狂気しかないのである。

こうした狂熱は、明治の社会主義の底流にずっと流れてきた。例えば、社会主義者とは言えないかもしれないが、その源流に位置する北村透谷にも「熱情」「情熱」という文章があるし、田岡嶺雲にも「天才と狂熱」「神祕と狂熱」という文章がある。高山樗陰(樗牛ではない)にも「極端なれ」という文章があり、松岡荒村にも田中正造を狂熱的実行家として称えた文章(「尾尾鉦毒問題」)がある。これらは、明治の思想を支配したカーライルの『英雄及英雄崇拜』の影響でもあるが、同時に明治の束縛された現実からの牢獄意識と、その牢獄を突き破ろうとする精神のほどばしりでもあった。

大逆事件後の「冬の時代」も、大杉にこういう根源的衝動を与えた。「生の拡充」の主張もニーチェやベルグソンの影響はあるにしても、その根源衝動は、たえず監視されている生活をなんとかして一杯に広げたいということにあった。官憲の作成した大杉の「言動調査」は、このことを反面から如実に語っている。今までの「調査報告書」に着目した大杉研究はでないが、官憲のスパイしたものであっても、その点を用いながら逆用すれば、かえって従来の大杉への一面観を打破することができる。大杉が「近代思想」の「知識の手淫」にあきたらず、直接労働者を相手に語りかける目的で創刊した月刊「平民新聞」(大三・一〇)が毎号発売禁止処分を受けたことや、四年十月に復刊した「近代思想」が第二号から連続発売禁止になったことは今までの文献でも知られてきたが、官憲の「調査報告書」を読むことによって、かれらがいかにか大杉の糧道を断って、

思想的存立を否定しようとする躍気になって狂奔していたかが伺えるのである。

当局の圧迫は、大杉の事業だけでなく肉親にまで及んでいるのである。大杉の弟勇は、姉たちの尽力によって高等工業を卒業したといわれているが、大正五・六年頃、横浜の某鉄工場や川崎の日本蓄音器会社に職工として転々としている。大正七年九月、川崎を引払って日立鉱山制作所に就職したが、大杉の実弟だとわかってわずか半月位で解雇されている。これらも官憲の追跡調査が福いしたためであろう。また大正五年十二月には、名古屋に在住していた妹の秋が自殺している。原因は大杉の葉山事件によって結婚話が破談となり、それを悲しんでの自殺とみられるから、直接当局の圧迫によるものとは言えないかもしれないが、官憲の言動調査がつねにこれら弟姉たちに及んでいたことを考えるならば、間接的には影響なしということはできない。

ここで大杉の恋愛に触れなければならない。大杉は弟妹については何事も話っていないけれど、恋愛についてはかなり多弁であった。同じアルバイトなことであっても、後者はそれによって大杉の真価が問われ、対社会の関係への重大な転機をなしたからである。この恋愛事件は多角恋愛として騒がれたが、大杉の自由恋愛の理念の具現という面があるにしても、直接の動機は要するに当局の圧迫が激しくて、しかも糧道を断たれていた時に、協力の手をさしのべてきたのが女性だったことによる。伊藤野枝は「平民新聞」創刊号が発売禁止になると、敢然と擁護の文章を「青鞥」に掲載しているし、第二号が印刷中から当局の監視下におかれている状況の下で、刷了と同時に大部分を渡辺政太郎の手をへて、自宅に隠匿している。

神近市子も復刊「近代思想」の編集を手伝っているし、また相つづき発禁によって生活に窮していた大杉を、自分の衣服をはいでまでも金銭的に援助していたことは有名な話である。

もちろん、この女性関係は、大杉のエロスのアナキズムと無縁ではない。大杉は堀保子を愛していたが、保子は明治四十四年頃から病気がちであり、それによる性的不満もおそらく女性関係に影響したことであろう。しかし、この多角恋愛も一時的には重なっているが、結局、伊藤野枝と結ばれる一つのプロセスではなかったかと思われる。「かくして、もう何もかも失ったような僕が、その時に恋を見出したのだ。恋と同時に、その熱情に燃えた同志を見出したのだ。そして僕はこの新しい熱情を得ようとして、ほとんどいっさいを棄ててこの恋の中に突入していった」(『自叙伝』)。この恋の対象には神近市子も含まれているが、伊藤により傾むいていることは言うまでもない。

のちに大杉は伊藤野枝との恋愛を『死灰の中より』という小説に書いているが、それによると伊藤野枝という個人と、滅びゆく死灰すなわち谷中村とがダブっている。大杉の『死灰の中より』及び「小紳士の感情」と、伊藤野枝の小説『転機』は、この両者のダブル・イメージをあきらかにしている。大杉は谷中村に居残った十四・五軒の村民が、当局に最後通牒を突きつけられて、堤防を切ってしまうとおどかさされた話を聞き、「それ、面白いな、ほんとうに一人残らず溺れ死んでしまう方がいいんだ。なまじっか助けられたりしちゃ、それこそ本当にみじめなんだからな」と言い放った。一方、谷中村が伊藤野枝の関心を喚起したのは、大正四年一月であり、野枝が谷中村についての長文の手紙を大杉に送ったのも、この一月末

のことであったから、大杉がこういう無責任な放言をしたのも、だいたいその前後のことであつたらうと推定される。

「小紳士の感情」は、いわばそういう傍観者のもつニヒリズムに似た一種の弥次馬根性に対するにがい反省をモチーフとして書かれている。この文章は、「近代思想」「平民新聞」の刊行をめぐる堺利彦との意識のズレをも反映している。堺利彦が大杉・荒畑のサンジカリズム研究会(大正二・七より)について、「いわばまあ、どこかの旦那衆が、自分免許の義太夫を喰って聞かせるために、親類縁者を寄せ集めるようなものなんだからな」と冷笑したこととも関わっている。「これには、多くの同志に対する不満とともに、軽い自嘲と、および主としては僕等に対する嘲笑が含まれていた」と大杉は書き、その傍観者の態度に憤りをおぼえるとともに、「しかしまた、その皮肉をうまいなあとも思った。そして多くの同志に対する不満にはまったくS(塚)に同意するはかなかった」と書いている。

しかし、大杉のニヒリズムに似た野次馬根性には、堺利彦の傍観者的な冷笑とはやや異なったニュアンスがある。それは一種の滅亡の思想ともいべき徹底性にあつた。滅亡の底からでなくては、新しいものは再生してこないという思想である。それは次の言葉によって実証される。「官憲が堤防を切ると言って嚇かす。僕は官憲としては当然の無法だと思った。村民がいづれは誰れか助けてくれるに違いないと思って溺れ死んでも出て行かないと頑張る。僕は永年虐遇されてきた村民としては当然の卑劣、当然の意地だと思った。そしてこの最初から当然だと思わせる理知は、この無法に対する憤激やその卑劣と意地とに対する同情や同感、本当の実感として深めさせない、いい加減なところで上滑りさせる」と。大杉はここで、

黙って傍観している自分を形容して、「ちやうど芝居を見るように、泣きつゝ面をしながら面白がつて見ているのだ」と述べている。面白がつて見ているかぎりにおいて、谷中村の村民と同化してはいない。「その犠牲や悲慘を少しでも分とうとはしない」自分の実体に突き当たったのである。そういう自分のいい加減さも含めて、「ほんとうに一人残らず溺れ死んでしまう方がいいんだ」と、死滅からの再生を投げつけたのである。

そういう時に、伊藤野枝から長文の手紙を受けとったのである。それは大杉の表現に従えば、谷中村についての「幼稚なしかし恐らくは何ものをも焼き尽し溶かし尽すセンチメンタリズム」(『死灰の中より』)に満たされていた。そしてそれは硬直した大杉の心の中に流れ込んだ。大杉は伊藤野枝によって外から内へとだんだんに進んで来た自分自身に対する不満に、深い反省を与えられた。憤るべきものにはあくまで憤り、憐れむべきものには、あくまで憐れむ「僕の幼稚なセンチメンタリズムを取返したい」と思ったのである。この「虐たげられたものの中へ、虐たげられるものに向つて、躊躇なくかつ容赦なく進んで行きたい」というヴ・ナロードは、「幼稚なセンチメンタリズム」の回復をめざすエロスのアナキズムの再生である。

千葉監獄に入っていた時、突然一匹のトンボが窓から入ってきたことがあつた。大杉はそのトンボを飼って置くつもりで、結びつけるために帯の糸を抜きはじめた。糸を抜く途中で、ふと電気にも打たれたようにぞっと身慄いがし、「俺は捕えられているんだ」という考えが閃きのように大杉の頭を通過した。大杉は立ち上って、トンボの羽根を持って急いで窓の外へ放してやった。これと同じ電

流のような思考の閃めきと転回が、谷中村についても働いている。

「僕が彼女の手紙によってもっとも感激したというのは、要するに僕が幻想した彼女のこの血のしたたるような生々しい実感のセンチメンタリズムであったのだ。本当の社会改良家の本質的精神であったのだ。僕はY村(谷中村)の死灰の中から炎となって燃えあがる彼女を見ていたのだ。」

大杉にとって伊藤野枝は、谷中村の死灰の中から炎となって燃えあがる女神に近いものとしてイメージされている。大杉における幼児性の回復が、伊藤野枝といういわば「自然」によってはかられているだけでなく、そこに死と再生の秘儀もこめられていたのだ。葉山の日蔭茶屋事件(大五・一一)後、二人がほとんどすべての友人や同志にそむかれてしまったことは周知の通りだが、この事件の翌十二月十日二人ははじめて谷中村を訪問している(4)。この日に谷中村残留民に最後の立退き命令が発せられていたのである。大杉と野枝は谷中村の廢墟の悪路に悩みながらこれを踏んで、島田宗三の屋敷内の故田中正造翁の靈詞に詣でて帰ったのである。その詳細は野

枝の『転機』に書かれている。

プロメテウスの権力と対峙している現実から一歩立ち退いて、エロスのな幼児性の回復をはかることが、大杉のたえざる衝動であった。その底には、生に対する根源的な恐怖があったことは前に触れた。神近市子に刺された時にもそれがみられる。大杉は神近に刺されることそれじたいは少しも恐れていなかった。しかし、刺されたあとの神近の姿が、怨霊となって、半年間も大杉を悩ますのである。それは、今にも部屋を出て行こうとする市子が、大杉に呼びとめられてちょっと立ちどまって振り返って見た、瞬間の姿であった。その時、市子のびっくりしたように見ひらいたその目には、恐怖と憐れみを乞う心とが、いっぱい充ちていたと、大杉は書いている。「許して下さい」と彼女は振り返って、泣きだしそうに叫びながら逃げ出したのである。大杉の「お化を見た話」の中に描かれた神近市子像のうち、この時がもっとも女らしい「清潔」さをもっている。神近の側から言えば、血の決済によって大杉の裏切りに酬えようとした自己の行為の謝罪であるが、大杉の側から言えば、それは

NO30 隔月刊・11月号 定価六五〇円

# 伝統と現代

記念総特集 戦後思想の現在 9月末発売

■対談・戦後思想の現在 鮎川信夫・磯田光一 ■「近代文学」と知識人論 榎木剛 戦後マルクス主義の軌跡 三浦つとむ ■丸山眞男・大塚久雄と近代主義 松木健一 ■竹内好と戦後ナショナルリズム 北川透 戦後ニヒリズムとテカダダの思想 白川正芳 ■「思想の科学」 戦後プラグマティズム 室謙二 戦後保守思想の底流 白鳥邦夫 戦後民主主義の理念と民衆思想 ■森崎和江 六十年安保と吉本隆明・谷川雁 渡辺京二 高橋和己と全共闘運動 菅谷規矩雄 ■三島由紀夫と戦後近代 伊谷隆一 ■連合赤軍の象徴性と戦後革命思想の現在 遠丸立

伝統と現代社

東京都新宿区市ヶ谷町2-5  
TEL 269-7995  
振替 東京 156965

大杉の多角恋愛の破綻の承認であるのだ。その姿が、夜の三時頃(それは刺された時間である)、伊藤野枝と寝ている大杉の足もとの壁に、ありありとあらわれるのである。そのたびに大杉は、おびえたように慄えあがって、一緒に寝ている野枝にしっかりとしがみつくのである。すると野枝は「ほんとにあなたは馬鹿ね」と笑って、大きなからだの大杉の頭を、子供のようには撫でるのである。これは大杉が幼児に返って、母に抱擁されている姿である。

伊藤野枝は、福岡の西の方にある今宿村の松原という部落に生まれた。この松原は一種の相互扶助的な自然村であった。そのことを野枝は「無政府の事実」という文章に書いている。それによると、この自然村は約六七十戸の家が、六つの小さな組合に分れ、聯合して相互扶助の自活村をつくっていた。「ずっと遠い昔から、他人の不幸をつくり出す事ばかりねらっているような役人に対して、村の平和を出来るだけ保護しようとする、真の自治的精神から来た訓練」が行われていたと、野枝は記している。このことを大杉の側からみれば、大杉は野枝を通して、野枝の向う側の奥の方にある自然村を透視していたということになる。谷中村も廢墟となることによつてやっと自然に帰り、大杉の柔かい心の地底に汲みこまれていった。それは明治三十年代からのたたかいの敗北の衰残の姿であるとともに、官憲に打ちこわされることによつて、自然状態に帰ることのできた農民の姿でもあった。大逆事件後の売文社に集まった自分たちを評して大杉が「世間から取除者にされた」(『売文集』)と自称したように、谷中村も水の底に沈められる「不義の子」(吉田喜重「エロス虐殺」)なるが故に、自然の子となることができたのだ。大杉はダーウィンの進化論から自然科学に開眼された。ダーウィ

ンの進化論は、その祖述者たちによつて、弱肉強食的な生存競争によつて生物が進化するというふうになり、誤り伝えられたが、ダーウィン自身は、相互扶助による生物の進化の面も認めていた。クロボトキンの『相互扶助論』は、ダーウィンのこの面を發展させたものであると、大杉は『クロボトキン研究』で述べている。しかし、この相互扶助はたんなる愛や同情ではない。「それらの感情の奥底に、きわめて長い進化の行程を経て、動物と人間との裡に静かに発達して来たある本能である」。また「人類の共同意識」である。

カーペンターの『文明—その原因および救済—』(石川三四郎訳)には、「ラマルク対ダーウィン」の項がある。それによればダーウィンの「適者生存」は、生物が生後、外来的偶発事による成功の一種によつて進化すると考えるが、ラマルクは生物にまず欲望が生じ、その欲望に導かれて、内面的に生長した難戦苦闘によつて、一つの機能を獲得するものと考へたらしい。すなわち、この「生長」の内部分法則を生物進化の重要な契機とみるものであって、この人間の生成發展の源泉である衝動、欲望はその完全な形態では、愛(ラブ)と呼ぶものだといふ。この愛(ラブ)も原初的な欲望に基づいているものである。したがって相互扶助をたんなる愛や同情というふうには心理化すれば、その本来のもつ力を失ってしまう。大杉と谷中村をつなぐものにも、死灰の中に埋もれている自然村というイメージがあり、水底に沈められる「不義の子」なるが故に手をつなぐことができるという共通の媒体があったのである。

ただ大杉はその「不義の子」の叛逆を特権と化せようとした。大正八年十月に創刊した「労働運動」には、そういう逆転がみられる。葉山事件以後、ほとんどすべての友人や同志にそむかれて、貧窮の

なかで野枝とひっそりと暮らしていた大杉は、この逆境を特権と化し、第二の反撃に立ち向かっていったのである。和田久太郎とか久板卯之助とか近藤憲二などという新しい同志は、こうして獲得されたのである。大杉が平民労働者との一体的感情を養うために、亀戸の労働者街に移った時も、和田久太郎と久板卯之助が同居した。松田道雄はこれを「一次集団」と名づけ、かれらは子ども時代に薄幸な生活をおくり、肉親たちとの深い「一次集団」をもった経験がなかったために、大杉の周囲にはじめてそれを持つことができたのだと述べている(現代日本思想大系『アナーキズム』解説)。これは「労働運動」の傘下に集まった人達の経歴を、もっと厳密に突きつめてみないと実証できないことである。

しかし、そういう事実問題を越えて、そこにエロスの結合があったことは認めなければならない。ただ、相互扶助がたんなる愛や同情ではなく、それらの感情の奥底に「ある本能」「人類共同の意識」があるごとく、大杉を中心としたエロスの結合を支える底辺には、共通な闘争本能が働いていた。近藤憲二は大杉の『生の闘争』を読んだ感想を、「私はそのなかに重たく冷たい鉄鎖のにおいをかき、鎖をゆさぶるもの力と希望とを感じた」と記している。この「鉄鎖のにおい」と「鎖をゆさぶるもの力と希望」がなかったならば、「一次集団」としてのエロスの結合も、忽ち風化して日常的な平凡な家庭と交らぬものになっていったであろう。しかし、かれらが単純に「心優しい人達」ではないことは、かれらが国家権力に対して絶対に容赦することのない戦闘的意志を強固にもっていたことで知られる。

ただ、かれらはこの権力に対して他の権力をもってすることをし

なかった。その点がマルクス主義と異なる点である。マルクス主義は権力の否定を、他の新しい権力をもってするという矛盾をもっている。この矛盾はマルクス主義のみのもつ矛盾か、それともこの地上的なものに随伴する必然の悪であるのか。大杉がロシア革命に遭遇して問われた問題もそこにあっただろうと考えられる。しかし、当時の大杉にはそこまで突きつめて考えることはできなかった。今日、大杉を超えるとしたら、その間にまで突き入らなければならぬだろう。しかし、それはわたしの専門でもないし、本稿の目的でもないので、このへんで筆を擱くが、終りに臨んで野枝の叔母、代キチの大杉評をつけ加えたい。

「大杉はほんとによか男でござりました。とくに女子供に対した時のやさしさは、何ともいえないものでござりました」(瀬戸内晴美『美は乱調にあり』)。

(1) 昭四八・九「日本文学」所収「大杉栄について」。

(2) フランス無政府主義機関誌「ラ・ナルシー」に掲載された非軍備主義の檄文。

(3) 注(1)に同じ。

(4) 官憲の「言動調査」によって確認される。中込道夫著『田中正造と近代思想』は、大杉と野枝の谷中村訪問を大正七年一月としているが、これは野枝の『転機』の書かれた年月を訪問の時期と混同してしまったものである。

(5) 石堂淑郎「性を拒否する思想」(昭四五・三・二三「日本読書新聞」)。

(『文学』昭和四十九年六月号より)